

中西夏之一キアスム chiasme

飯田高誉 キュレーター

私が眺めるのはカオスではなく、事物である。
そして支配しているのはまなざしなのか、事物なのか、次第にわからなくなってくる。

メルロ＝ポンティ（註1）

中西夏之のアトリエは、緊迫した空気感が張りつめ、しかし、そこでは一点一点の作品イメージが緩やかに揺動し重なり合いながら連鎖している。「見るものと見られるものが相互に可逆的に侵蝕し合っている状態」、すなわち「キアスム / chiasme」（メルロ＝ポンティ）的な位相空間が発生している。あたかも中西の作品シリーズ「弓形が触れて」の弧線が限りなく巨大な円を浮かび上らせる予感を誘引しているように、作品の単体性から離脱し、ある原理によって全ての作品がアトリエという磁場に蝟集する。このアトリエにおける発生状態を展覧会場となるSCAI THE BATHHOUSEで再現したらどうなるだろうか。SCAI THE BATHHOUSEは、かつて時代に見捨てられた大衆浴場であった。以前その浴場を改修して劇団「第七病棟」のアトリエと化し、「オルゴールの墓」（作：唐十郎 出演：緑魔子、石橋蓮司）を上演したことがある。その後、再び廃墟となり、そしてギャラリーとしてSCAI THE BATHHOUSEが誕生し、新たな表現の場として再生される。

中西のアトリエで発生していた「交叉配列」（註2）をSCAIにそのまま転移する試みこそ本展覧会の趣旨である。ホワイトキューブで一点一点を自己完結した方法論で展示することを敢えて止め、中西のアトリエがそうであったように、「キアスム / chiasme」的な位相空間を発生させることを意図的に行う。瀧口修造が「中西夏之考」の中で次のように言及している。「（中西夏之の）タブローはいわゆる反絵画といった態度でなく、むしろタブローとしての静明なたたずまいをさえ示しているが、その構造や動勢、また色彩などの結合が緊張した連続性のなかで息づいているのを感じる」（註3）。本展覧会は、場所性から切り離された近代絵画的方法論と対峙しながら、SCAI THE BATHHOUSEという固有の場と匿名的な場を複合的に措定し、「絵画」の在り方を探求する。

註1 「絡み合い—キアスム」（メルロ＝ポンティ・コレクション ちくま学芸文庫）

註2 「交叉配列」キアスム概念と同義語。「人間が自分の左手で右手に触れるとき、右手は『触れられるもの』であるが、その右手が逆に左手に『触れるもの』であるとも考えることもできる。このような触覚の二重感覚こそが、身体が世界を構成するものでありながら、同時に世界に起源を持つものとして、世界に内属していることを示している。身体と世界（＝場所）とは同じ『肉 chair』という生地で作られており、身体による世界の再構成と世界による身体の再構成は常に綿密に『交叉し合っている』（モーリス・メルロ＝ポンティ著『見えるものと見えないもの』（みすず書房、1989年）p.176、181-215参照

註3 「磁界に沿って—中西夏之考」（テキスト：瀧口修造 南画廊 1976年）

